
ヘンテコな食虫植物たち！

須崎杏子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘンテコな食虫植物たち！

【Zコード】

Z4622D

【作者名】

須崎杏子

【あらすじ】

ある、地球のどこかにグリーンランドといつとこうがありました。世界中の植物達が集まるところ。ヘンテコな食虫植物もいます。そして、植物達と会話できるたった一人の男性は、相談室を開きました。そこからどんな悩みがくるのでしょうか……。

第一回おたよつ 消化不良のハエトリソウ

「こ」は植物達が集まる樂園。グリーンランダと「単純な名前の樂園です。

そこにいる植物達のへんてこな悩みを解決するところがあります。おや。また、届きましたね。では、よんでいきましょ。

消化不良です。

わしはまだまだ生きたいが、消化不良で安心してハエを食べられぬわい。

「ついばあいはどうすればいいんじやの？」

名前：ハエ・取り、食らう自由気ままな老人

ちょっと、生活ぶりを見させてもらいましょう。

「お、とまつたな！ こつなればわしの勝ちは確定したものじゃ！」
ハエトリソウはすぐ、葉を閉じる。

（しまつた。罠か！）

ハエは逃げようとするが、ものすごく早く閉じるので逃げられないと。

パックン。

「ゴフツ！ やはり年じやのづ。つおつほ！」

このハエトリソウは長年、かれずに生き抜いた老化した食虫植物らしいです。

「バーク」

ハエはそういうととび立ち、逃げていったのです。

「消化不良かのう?」

もうほどんど折れかけている葉をみていったのです。

「がふっ」

せきをすると折れかかっていた葉とともにねばあーとした液体を吐き出しました。

「ばかじやのう~」

よこから声がある。同年のはえとつ ソウだつた。名前が普通ではないのは、やはり以前も必要だからだ。

「なんじやとお~?」

売られた喧嘩は買つべし。お互に口に歯み付かあつ。

「ちよつと、ちよつと~。」

「じめんじや」

左の方から声がした。それは自分より遅くでてきた HATE-OR ISO^{リンク} だった。

「ハエ! 早くきてくれ!」

「いんや、わしの方がさきじや」

(誰がくるかあ~!)

そういつて、ハエは逃げる。

「ななな、なんてことをするのじやあ~!」

「こつちのせりふじや、このたわけ!」

かみ付きたびに、横から唾液（溶解液）があふれる。したにボタボタ落むとシコウーと音が聞こえるがなんの音かはわからない。

「あたりがきたのじや~!」

そういつて葉を閉じた。

パックン

「じふつじふ! ひやが、はくふと、こんでいまつ~!」

ぶじ、食べ終えたら、またせきをする。そしておとつと吐く。

「つわも~!」

「アロアロアロとお腹がなる。」

「ふんあやー！」

「暴飲暴食のせいじやな、ふおふおふおふおふおふおー！」
お腹いたい、腹痛が起きたと訴えかける田。

「ばーか」

「ぐえつーー？」

老人にはさぞ似合つ声。

「老人はここまでかの？……。暴飲暴食したせいのかの？
つて本当にしていたんかいなーー！」

「まあ、大丈夫かい？」

「ばばあ、視聴者からいこハエトリソウだと思われたいからそんな
ふうにいつたんじやろ？」

「きい！ じんのたわけじじい！ なぜわしの思考がわかつた！？
「いやいやと長年の付き合いをしていたからじやの？ まるわかり
じゅーーー！」

いつして消化不良のハエトリソウはいつせつ平和にくらしました
と、や。

「ぜつたい平和じやないと思つれ」

「かわいそうだな」

「まあ、あいつは鈍感だからな
だれですか？ 私のうわさをしているのは……？
「わしは、平和ではないのじゃよ！」

第一回おたよつ 飽きたモウセンゴケ

……前回のお便りでは、ハエトリソウが可哀想でしたね。ツップ。
えへ、次はモウセンゴケからのおたよりです。

題名：ハエはあきた…

私は最近ハエは飽き飽きしました。けど、私がいるところは、臭いのでハエがたくさん飛んでいます。そいつらを捕食していますが。うわさに聞くモンシロチョウとかを食べてみたいな。

名前：毛の先つちよは溶解液のかたまり

どうにもうつこもなれませんね。とりあえず、生活ぶりをみよつ。

「あ～もう一 ハエばかりいて飽き飽きしてきましたね…」
「モウセンゴケですか……。なにかがまぞつてます
「ちょ、なに、その言い方（笑ってる）」
「なんかまともですね…」
「べつにいーじゃない？ ところで、ハエ飽きたね…」
（えー？俺のこと飽きたの！？）
「モンシロチョウとか食べてみたいな～」
「どこからその情報仕入れたのですか……？」
「ようし！ それなら俺を食べてみよ！」
「ダメです！ そんなのとけちゃうじゃないーー！」
「俺の心配より自分の心配！？ てか俺も解けちゃうんじゃないかな

テンション高い種ですね、モンセン「ケは。

「まあ、ラフレシアとかゆー花のせいでハエしかとんでこないしね」「ねえ、そういうえばアンタはモンシロチョウ食べたことがありますか?」

「H A H A H A H A H A、俺は食べたことがあります!」

「貴様——!!」

……なんかグロい音が聞こえるのは氣のせいですね

「……あ! けつこうまい!」

横にいたモウセンゴケがいなくなっていますよ.....。

「お前モンシロチョウ食べたことがあるんですね。どんな味がしました? つてどこにいったの」

自分で食べたのにわからないんですか?

「歩けたらいいのになあ。人間に植えられたらしいのに」

「huhahahahaha! そうだな! 無理な話だけどな!..」

「お、お前生き返ったのか!?」

「俺は不死身い〜!」

すごい技....

「それ以上笑うのなら、もう一度死にたいですか?」

「その敬語で死ねと言われたら怖い!」

「私にかなうものはなし!」

「ふつ」

「ふつ」

「それ以上笑うな!」

「バカのお前に笑っちゃ悪いのか?」

「バカはお前です」

「やいバーカバー力」

「やいバーカアホボケカラ、いやチリ!」

「ええ!? 僕ってゴミ以下の存在!?!」

「低レベルな喧嘩ですね.....。」

「でもな、『ちりもつもれば山になる』ってしつてるか！？」

「ちりもつもれば山になるってことさ、動けない役立たずの奴が山となつた時の言葉なんです！！」

「ええ！？ そうだったの！？」

「ええ！？ 信じた！？」

「ああ！ そうなんですって！」

「ええ！？ そっちも信じてるーー！」

「だいたいハエって飽き飽きしてこまひぢやうんです！」

まだその話題引きずつてた！－

「そういうながら食べてるのはだれ？」

「腹も減つては戦ができるはずっていう言葉知ってるですよねー！」

「あ、そつか」

「納得しないでください…

「ところでハエ飽きたって手紙送りました？」

「なんでお前の事情を書かなくちゃいけないんだよ（小さい声で）ひた……じゃなくて、植物にかかせたんですか！？」

「えい！」

「ヘア！（ハロー）」

「ウル マン！？」

「ちがうー！ こんなかんじです！ ヘア！」

「馬鹿！？」

「バカかてめー！」

「バカじゃない、ってかなにしてたんだよ

「ぐー」

「いびき！？」

「ありや？ なんだこいつ

「新顔ですかね？」

「お前ら……。バカじゃなかつたらなんなんだ……」

「まともな意見です。

「「なんだと！？」

……。袋叩きにされている……。

「痛い……。ていうか自分を見直しなさい」

……も「こう言葉はありません……」

「自分?」

「見直せ?」

手紙を贈つてきたモウセンゴケのほうでは

『なにするんですか?』

『こつちが聞きたいくらいだよ!』

『あなたが先に殴つたんだろ!?』

『貴様の悪口が悪い』

『なんだとー!?』

ボカスカボカスカ

『ぜえ、ぜえ、ぜえ』

『なにするんですか。私はけんかは強いんだよ』

『まじで強い……。生命力が……』

『キブリみたいに言つなー!…』

「……」

そしてもうひとつモウセンゴケは

『うぜえんだよ! その歌歌つなつてつてんだろー!…』

『』

『……いい加減にしろよ』

『』

『』

ボカン！

『痛いよう』

『わがおみなし』

(うわあ、あのじゆの俺にでしゃべる)

「そしてうるさい。馬鹿どもが」

「お前の人生見直せよ」

「俺のセリフパウルだ！」

「ヘツヒ」

- すん

「苏復す一時。ハ日飽食たナジ。

今頃それを思い出した！？

卷之三

「ハ工ですがー、先ほどクモがいましたよ」

卷之三

なってたのに立ち直り罷!?

「お腹すいたね……」

あー！ 電気かなくな
.....

ブチツ

「あー、もう切れちゃいましたか。これを贈つてきたモウセンゴケにはモンシロチョウを百匹分送りましょう。それでは」

店内にはいり、ほかのお手紙を見る。実はテレビ中継のためにこ
んなことをしているのだとか。

最終回 夢遊病のウツボカズラ

……前回のおたよりでモンシロチョウを五四分あげました。
それにしても敬語とか混ざりましたね。

えー、次のおたよりです。

題名…夢遊病に困っています。

私はいつもいつも夢遊病のせいで虫じやないものまで食べてしま
います。もう死んじゃうかもしないのでどうにかしてください。

名前…落とし穴

はいはい。それはどうでもできないのでみてみましょうか。

「おーー ウツボカズ！ また夢遊病のせいで俺は寝られなかつた
ぞー！」
「「」、「めん」
「おい！ ウツボカズ！ 俺の葉っぱくつただーー」
「あれはわざとじやないって」
「あーー。いじめですか。しかたないですよーー
「俺の葉が変だつてみんなに言われる始末なんだぞーー
「ぐすん」

あらり、泣いちゃいました。かわいそりですね。

「じゃあどうにかしてよ

「え？ 僕に？ うーん」

悩まないでください

「僕ね、困ってるからおたよりだしたんだ。そしたら無理だつて。
がんばつて13歳までがんばれつて」

「おー」

ちゃんとの話はみているよー

「どんな風にいっていた？」

「それね……『コラア！ あんな変ないいがかりつけおつて！ なんでも感でもきくわけじゃねーぞ！ それとな、13歳超えたら夢遊病なおるぞ！』だつて

嘘つくんじやありません！ つてかそんな喋り方さえしてないし素直に教えているじゃないですか！」

「まじか

「うん」

ええええええええ！？

「僕ね、今思つたんだけど

「何？」

「僕の誕生日なんだ」

「ふーん

へー

「だから祝え

「わかった。呪つてやるよ」

「呪えじゃなくてえ、祝えつていつてるんだよっ

「じゃあハッピーバースデートゥーゴウー バカウツボカズラ

「どさくさにまぎれていうんじゃない！…

バカはね……。確かにそうだけど

「ふーん」

「わあーい、ハエだー www つてなめてんのか」

「い」「ごめんね」

立場逆になつた――――――

「だいたいな、僕の13歳の誕生日なんだからそれぐらい祝つても
らわなきや」

「13歳?」

「そう!」

ちよつとまつげぐださー。えつと

「13歳なら夢遊病治るんじゃないかな」

「え」

はあ……直覺してくださー

プチッ

今回は意外と早くできましたね。
次回はどんなおたよつてこれが最終話――?
でもこんな短すざるせつはいやなので私の昔話を……。

「ねえ、父ちゃん。」れなに?」
「それはねえ、食虫植物だよ」
「しゅくぢゅーしょくぶつ?」
「うん。虫を食べちゃうんだ」
「怖いよ。虫食べちゃうの?」
「そうだよ。たべて生きるの」

「ふーん」

私はそんなもの知らなかつたですからね。

「じゃあ父さん、とき家かえつてつて――」
「おひ」

「うう。心臓病が……」

「植物が喋つた！」

「しい――――！」

なんとも不思議で、心細い感じがした。（教科書の言葉だね、これ）

「とにかく、ここにまたくるから！」

「えへ。じゃあクモとつてきてー！」

「うんわかったー！」

そのあとえぐく食べる姿にぞっとしていたけどね……。

さて、これは最終おたよりでした。

たった三回で終わるとは作者はめんどくさがりなんですね。
でわでわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4622d/>

ヘンテコな食虫植物たち！

2010年10月8日15時14分発行